べらぼうな男（ヤツ）

花登筐

独立編

花登筐

人妻物語

独立編

文藝春秋

花登筐（はなと　こばこ）

昭和3年、滋賀県に生まる。26年、同志社大学卒業後、作家活動に入る。テレビ作品「番頭はんと丁稚どん」「やりくりアパート」で喜劇作家として頭角を現わし、以後演劇、テレビ作品、小説などに幅広く活躍。43年、東海テレビ「飛驒古系」で明治百年記念芸術祭芸術祭賞を受賞。現在「劇団喜劇」主幹。

主な作品

「細うで繁盛記」講談社
「どてらい男」徳間書店
「あかんたれ」文藝春秋
「花ぼうろ」番町書房
「思わずドキッとする話」青春出版社
「じょっぱり」サンケイ出版
「おくどはん」潮出版社
「花登筐長篇選集」十巻・講談社

さわやかな男（ヤツ）（独立編）

昭和五十四年九月十五日　第一刷

定価八八〇円

著者　花登筐

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三

印刷　凸版印刷

製本　加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Kobako Hanato 1979 Printed in Japan

さわやかな男（ヤツ）（独立編）

装幀　粟屋　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

生きる

それから四年経った。

昭和二十一年の夏、終戦の翌年勝は内地の土を踏んだ。（生きんとならん）と誓った通り、生きて祖国の土を踏んだのである。

その為に中国戦線で、勝は揚子江の水の中で三日三晩敵弾を避けて隠れていたこともあったし、ビルマの湿地帯の沼地で這いつくばって敵機を避けたこともあった。

そして還って来た勝には、やはり死地から生き残って来た者独特の精悍さが漲っていた。

勝は敦賀の港で引揚げ船から降りると、京都へ向う途中、故郷の近江八幡の駅で降りた。

自分の眼でしみじみと故郷の琵琶湖の澄んだ水を見たかったのである。

一足延ばして京都へ帰れば、そこに家族やそして文子にも逢えることは知っていたし、戦地ではそればかり考え夢にまで見た京都であった。

だが、それは内地が戦災で全滅になったとの噂を聞いたからで、京都だけは傷つけられなかったと復員船の中で船員から聞いてからは、安心が先に立ってまず故郷へ寄ったのである。

そして、勝は氷川先生の思い出のある川岸へ寄ってから、湖畔に立って改めて琵琶湖の水の清さを見て、その美しさが戦争を経ても保たれているのが不思議であった。

しかもこの琵琶湖には戦争の傷痕のかけらさえもなく昔の姿が残されているのを知ると、まるで奇蹟を見るかのようにじっと見つめていた。

勝はそこで何時間坐って湖を見ていただろうか。

勝は立ち上がると町へ向って歩き出した。

だが勝は訪ねるにも町に知り合いはなかった。近所の人とか小学校時代の友人とかあるにはあったが、この町からあんな去り方をした勝は知り合いに逢うことも億劫であった。

だが勝は町を横切ると寺へ入って行った。

この寺は勝が中学時代何度も来た寺であった。いや京都へ行ってからもひそかに訪ねて来たこともあった。

ここには氷川先生の墓があったのである。

勝は勝手知った寺の庭を横切って井戸端へ行った。

そこには墓地への参詣者用に水を汲むバケツが置いてある筈であった。

だが、勝は探したがバケツはおろか手桶すら見当たらず、よく見ると貼紙がしてあった。

〈バケツが手に入りませんので、各自バケツを持参下さい〉

その貼紙は、勝が故郷で見た唯一の戦争の足跡であった。物資が不足をしていることは、勝も聞いていたが、敦賀の闇市を通りいろいろな品物を目撃した勝はそれ程のことはないと思っていたのに、今バケツのない墓地を見て初めて物資の不足のかなりひどいことを現実に見てとったのである。

仕方がなく勝は荷物の中から飯盒を出すとその中に水を入れて墓地へ向った。

そして勝は氷川先生の墓の前へ立つと呆然と墓を見つめた。

詣り手もないのか、先生の墓は枯れた松葉や木の葉の落ちるにまかせ半分程埋っていた。

「先生……」

勝はその枯葉を素手で取り除いた。枯葉の下は苔で覆われていた。しかし勝がその苔は落とさなかったのは、先生の体を包むものがあった方がいいと思ったからである。

その時、後を通る子供の手を引っ張った婆さんが居た。どことなく都会の匂いがするこの婆さんは、疎開と称する避難をして来て居着いているのであろうか、土地の人間でないことは勝にも感じられた。

勝はその婆さんの手に持っている線香を見ると、かつては井戸端に線香も置いてあったことを思い出していた。

「お婆さん、お寺へ行けば線香があるのですか？」

「いえお線香なんかございません。戦争中役に立たないものは作らなかったのでしょう」

そう説明してから勝を見つめて、

「復員のお方ですか？」

と聞いた。

「そうです」

「それはご苦労さまですね」

婆さんは手に持っている線香の三本の内、一本を勝の前に出して、

「もしよろしかったらどうぞ……」

「すみません」

勝はその婆さんの親切が嬉しかった。

その線香を墓に供え、雑嚢の中から支給された乾パンをとり出しハンカチを敷いてその上に置くと掌を合わせた。

「先生、勝は今無事生きて帰って来ました」

勝の瞼の中にあの透き通るような白い肌を見せた氷川先生の笑顔が浮かんだ。

戦争で支那大陸を拠点に方々へ廻って多くの日本人や、美しいと言われる中国美人を見たが、やはり氷川先生より

美人には逢わなかった。
「先生、又、今日から約束した通り頑張ります」
佐藤田一族と戦うと言いたかったが、言わなかったのは、引揚船の中で財閥解体が実施されたと聞いていたし、日本の実業界の事情もわからなかったからである。
勝は、もう一度合掌すると、
「又、ちょいちょい来ますから、淋しがらんで下さい」
閉じた勝の眼の中で先生が「ありがとう」と答えるのがはっきり聞こえた。
勝は、再び雑嚢を背負うと墓地を離れた。
線香をくれた婆さんに礼を言おうと思ったが、姿が見えず、そのまま墓地を抜けて井戸端を通る時、墓地へ飯盒を忘れたことを思い出して引き返して墓地へ入ると、何気なく墓の方を見てハッとした。
あの婆さんが先生の墓に供えてある乾パンに手を出しているのである。
そして、一つは孫にやり、一つは自分の口に急いで入れると、後はハンカチごと懐へ入れ更に飯盒をつかむと、足早に奥の方へ消えたのである。
あの「ございます」と丁寧な言葉を使っている婆さんが、墓地の供え物を盗むことに恐ろしさを感じたのである。
勝は、怒鳴りつけようと思ったのを辛うじてこらえた。
子供の泣き声が聞こえて来たからである。
勝は逃げるようにして寺の門を出た。
線香をくれた時、日本人の人情は変わっていなかったと思ったが、その人情も裏切られてしまった勝である。
勝は足早に八幡駅へ向った。待合室に入ると、いやでも敗戦の現実を知らされざるを得なかった。
まず切符を買う為に長蛇の列が出来、待合室には闇屋が群がっていた。そしてその闇屋の一人が乗客に切符を売っている。
「京都まで十円でどや？」
十円、勝は胸の物入れと言われるポケットを手でおさえた。
敦賀で勝が引揚局から貰った軍隊での手当が十六円三十銭であったからである。
三年間の軍隊生活の収入が京都へ行く闇の汽車賃で大半消えてしまうのである。
勝は復員証明書で何とか改札口を通れたが、やがて汽車が着くと汽車に乗ることがこんなに凄まじいこととは知らなかった。
復員列車はそうでもなかったのに、その汽車は満員でその上闇屋達が乗りこむのである。
窓から入る者、閉じている窓ガラスを割る者、すべてが異常で狂っているようにさえ思った。
勝も辛うじてデッキにぶら下がると京都へ向った。

京都へ降りた勝は、長い二つのトンネルの煤で顔は黒く汚ごれていた。
しかし、誰しもそんな勝の顔を見て笑わなかったのは、人のことなど笑っていられないのであろうか。
勝は洗面所のちょろちょろしか出ない水で顔を洗うと、京都の町へ出た。
ここは戦災のない以前のままの京都の町であった。
だが、少し歩くと闇市があった。勝は市電に乗らず、堀川へ向って歩き出した。
堀川も昔のままの姿であった。
川の姿も、水の色もそのままの堀川を見て勝は染めが続けられているのを知ると、ほっとした。
と言っても、帰って別に染屋で働こうと思ってのことではない。だが堀川で友禅をやっているということが勝に安心を与えたのである。
堀川に沿って北へ上って行くにつれて、勝の足は徐々に早くなっていた。
そして丸太町を越すと勝はそのまま北へ向うか、西へ曲がるか迷った。
北へ行けば染吉があるし、わが家へ帰るには西へ曲がらねばならない。
染吉を訪れることは出来まいが、せめて文子に帰ったことを何とか伝えたかった。
迷った揚句、勝は北へ向った。
そのあたりも以前とは殆ど変わってなく、戦争の名残りと言えば防火用水と書かれた桶が残っているくらいであった。
そして染吉の外観も昔と変わってはいなかった。
(あれからどうなったのだろうか?)
あの型友禅の東京との取引は流れ、誓約書通り都屋百貨店との取引が優先されたろうか。
聞きたいことが山とあった。よほどその門をくぐろうかと思ったがやはり出来なかった。あの綾部部長に誓約書を渡したことで、吉沢が勝をどう憎んでいるかは明らかであった。
しかし勝は文子に逢いたかった。
果たして文子がまだその染吉の建物の中に居るかどうかはわからなかった。
だが、どうしても逢いたかった。
勝は、そこで三十分程立って、文子が出て来るのを待ったが、文子はおろか人一人も出て来なかった。
勝はあきらめるとわが家へ戻る前にもう一度、今度は勝友商会のあったビルへ向った。ひょっとしてそこに文子が居るのではないかと思ってである。
だがかつて勝が文子と初めて体を交わした部屋のあるその建物には「××工業寮」なる名も読めない程古い看板が

かかっていた。
戦争中、軍需工場の寮に貸したのだろうか、それとも売ったのか、そして今、住人がいるのかさえわからぬ堅く閉ざした板を打ちつけた扉を見ると、勝は重い足を引きずって、初めてわが家へ足を向けた。
勝は不思議とわが家の家族は変わっていないことを察していた。
ほんの眼と鼻の先にあるわが家の路地は、まったく何ひとつ変っていなかった。
路地に敷かれた三和土のかけ跡から突き当りに祀ってある地蔵の胸の赤いよだれかけも出た時のままであった。
勝は一歩ずつわが家へ向った。
つい十歩ぐらいの距離だが、やはりかなり長く感じられた。
勝はこれ又昔そのままの建てつけの悪い格子戸を開けると薄暗い家の中からむっとする熱気が伝わって来た。
「お母さん？　誰かいてんのか」
と声をかけたのは、もし居たら驚かしてはならぬとの勝の配慮であった。
すると返事の代りに咳払いが聞こえた。
土間伝いに台所へ入って、部屋を見ると布団を敷いて背中を見せて寝ているのは父の平太郎らしかった。
この暑いのに戸を閉め切って寝ているのはどうしたのであろうか。
「お父さんか？」
二、三度、勝が声をかけると、漸く聞こえたのか、やおら体をこちらへ向けてじっと見ていたが、
「勝……」
と弱々しい声を出した。
「お父さん」
勝はその父のやつれ方のひどさにまず驚いた。
痩せるだけ痩せ落ちた頬骨がとがり、伸びるにまかせた無精鬚がまるで仙人のようであった。
その平太郎は、信じられぬように勝を見つめてから、
「お前よう……」
よく帰って来れたなと言いたいのだろうが、ヤニだらけの眼に涙が溢れて後は言えないらしかった。
「ああ帰って来た。お父さんこそどうしたんや？　病気か？」
「戦争中、徴用で工場へ働きに行ってなあ……」
「どこが悪いんや？」
「あちこち悪うてな……一番ひどいのはリュウマチや……もうあかん」
身体を動かすことも苦痛なのか平太郎はそれだけ言うのがやっとらしく咳こんだ。
勝は、そんな骨と皮だけの背中を撫ぜてやりながら変っ

たのは体だけでなく出征の時は遂に一言の口も利かなかった程の強がり屋の父が、今や涙さえにじませている弱々しい男に変わってしまっているのを知って驚いた。そして勝は急に母や妹の姿の見えぬのが気になった。

「お父さん、お母さんや美代子は？」

「働きに行ってる」

二人が無事であったことに、勝はほっとすると、

「働きにて、どこへ？」

「あやはそこの増田て練屋へ、美代子は四條通りの食堂へ」

そこで又激しく咳こむのを見ると勝はそれ以上聞かず、おさまるのを待って、

「とに角、お母さんに逢うてくる」

そう言い残して家を出てみると、体中ぐっしょり汗をかいていることを知った。

練屋の増田の工場はほんの一丁ばかり行った染吉から三つ橋を隔てた上にあった。

ここも裏手が堀川べりになっていて表から入るよりは、裏の工場から入る方が近く、挨拶を一々しなくてすむことも勝は知っていた。

戦争中は恐らく営業はやっていなかったろうが、工場と言っても、ボイラーで生地を練り、乾かすだけの加工業であるから特別な機械が要るわけではないし、戦後の再開も簡単に出来たのであろうが、その練屋であやが働いているとは一体どんな仕事をしているのであろうか。

徴用で体を悪くした父といい、そして母や妹と、この戦災を免れ、以前と少しも変わっていない京都にも、建物の代りに人間が戦災を受けていることを知ると、やはり心が重かった。

勝はその増田の工場の裏口から蒸気が吹き出している工場の中を見渡して五、六人の女達にまじって働いているあやらしい姿を見ると胸が痛くなった。

洗った生地をとり出しては干し場で乾かす。濡れた生地はかなり重く以前は男達ばかりでやっていた仕事を女手で、しかも老いつつある母がやっているからである。手拭をかむり、汚れた割烹着にもんぺ姿に長靴を履いている母のあや——。

どう見ても痛々しい姿であった。

そのあやが何気なく戸口の方を見て暫くは信じられなかったのか、それとも蒸気のせいで、勝を幻とも見たのか、たしかめるようにふらふらと二、三歩近づいて勝と確認するや、

「勝……」

我を忘れて近寄ると、勝の体にしがみついて来た。

殆ど体中を濡らした母の体も細りはしたが、父のような弱々しさはなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お前……よう……ほんまに……」
あやは声をあげて泣き出した。
勝はそんな母に何と答えてよいかわからなかった。
すると、そのあやを取り巻くようにして働いていた女達が集って来て、もらい泣きしながら、
「おあやさん、よかったな。待ってた甲斐があったがな……」
「これであんたも楽出来るで……」
口々に言葉をかけると、あやは、そんな一人ずつに、
「おおきに、おおきに」
と頭を下げながら、勝に、
「皆ようしてくれはったんや」
と紹介した。
勝も、頭を下げて礼を言うと、
「おあやさん、あんたの帰りを待ってな、あんたのこと言わはらなんだ日はなかった。せい出して親孝行したげてな」
一番年長らしい女が頼みこむように言うと、
「さあ、おあやさん、あんたはお帰り、後はあてらがやっとくさかい」
そう言って又仕事場へ戻って行った。
あやは堀川の流れの前に立つと又泣いた。
「ほんまによう帰ってくれたな……」
「死んだと思てたか？」
「ううん、思てへん。わてにそんな感じがなかったさかいな、お父さんに逢うたか？」
「ああ……かなり弱ってるな」
「戦争中、慣れん工場の仕事が祟ったんやろ。自分で自分を病気にしてしまわはったんや」
「自分で病気に？」
「ああ、徴用で工場へとられて、重い荷物担がされるのいやや、とか、油まみれになって汚ないとか愚痴ばっかり言うてはって、何とか病気した方がええてまで言い出さはってな、とうとう……」
勝には、そんな父の姿が目に浮かぶようであった。
「そやからあのひとは自分で病気招かはったんや。誰しも皆工場で働いてるんや。お父さんだけやあらへん。喰べるもんはのうてな、毎日、代用食ばっかりやろ」
「代用食て？」
「海草の入った雑炊とか、お芋とか……まめ、蒸しパンとか……」
「そんなにひどかったのか……」
勝は喰う物もなかった戦線での毎日を思い出した。
「喰べるもんは今も変ってへん……。けどそれもお父さんばっかりやない。皆そうなんや。それやのにあんだけいやがってはったら病気になる。体もつのは気構えだけや」
気力だけが支えである——。

死ぬことより生きることの難しい戦場では、ただ「生きて帰らねばならない」「俺は死なない」と考え続けることを支えにして生きて還って来た勝は、身をもってそのことを知っていた。

しかし、勝が意外な発見をしたのは、母のあやの変化ぶりであった。何事にも言うことも言わず、ただもめごとのないように夫の平太郎の顔色ばかり見てはらはらしていたかつてのあやの姿はそこになかったからである。しかも堂堂と夫の不甲斐なさを指摘し批判しているではないか。戦災のなかった京都でも、人間に戦争の傷痕をくっきり残していることを父を見て感じた勝であったが、こうして力強い人間に変わらせていることもあるのを知った。

恐らく、そのことを知ったあやは、夫を頼りにならずと見て、自から働き出したのであろう。

「美代子はどうしてる？」

「ああ、あの子も働いていてくれるけどなあ……あの子もせい一杯や」

「どこで働いてるんや？」

「食堂や」

「食堂で飯喰わせる？」

「ああ、食堂なら喰べるもんに困らん思たんか、自分から行くて言い出してな」

勝は美代子らしいと思った。

「そらな、今は喰べ物商売は華や。喰べ物さえ持ってたら間違いはないし、統制違反や言うても四條通りや新京極でも堂々と店開いてる。あの子のお蔭でちょいちょい口に入らんもん喰べさせてもらえるけどな……」

「給料が安いのかいな？」

「いえ、あの子も大変なんや。面倒見んならん人がいてるさかい」

あやは意外なことを言い出した。

「誰をや？」

「あの倉満はんや」

「何やて、あの男を？」

「終戦になる半年前、戦争で怪我して帰って来はったんや」

「負傷兵？」

「ああ、怪我言うても、足やられはったんやけど、まあよう気いつけてみんとわからんぐらいや」

あやの話によると、出征前あんなことがあったから、倉満亘が負傷して還って来たと言っても美代子がおいそれと逢いに行くことは出来なかった。

ところが、終戦と共に事情が一変した。

戦争中、軍需工場に切り換えていた倉満の父の工場は閉鎖され、しかもその父は戦争協力者として追放されたのである。

すると、その日から亘は生きて行くことを考えねばならなかった。
昨日迄は、京都の産業界に君臨していた家柄の、しかも与えられることしか知らなかったぼんぼんが、突然父の追放と共に与えられるどころか、自分の手で喰いものを得なければならなくなったのである。こうなるとぼんぼんは弱かった。
それを知って助けたのが美代子であった。
美代子が働き場所に食堂を選んだのも、それが目的であったのだろう。
こうして美代子と倉満亘の仲は、又元へ戻ったのである。
美代子は毎日、食堂で手に入れた喰べ物を持って倉満一家が住む侘び住居の寺の離れ家へ通った。そして、亘の両親の食事を支度し、洗濯などをすると、家へ帰って来るという。
「そうか……。そらよかった」
「お父さんはそれが気に入らんらしいけど……」
「何でや？」
「向うへ持って行く分、家へ持って帰ったら病気も早う治るやろて……」
父の平太郎なら当然、言うであろうことであった。
「お母さん、美代子はな、あの男と三年計画で結婚すること考えとったぐらいや。好きにさせたり」
「わてもそう思うてる」
そこで母と子はにっこり笑顔を浮かべて顔を見合わした。
本当に嬉しそうなあやの顔であった。
勝はこんな母の笑顔を見たことは一度もなかった。
かつては、笑いたいことがあっても、めったに白い歯を見せて笑ったこともなかったあやである。笑うことさえ夫の平太郎に遠慮していたあやである。
「嫁しては夫に従え」――恐らくそれが嫁のつとめだと思っていたのであろうか、夫の目を遠慮し感情さえ殺そうとしていたあやが、今感情をむき出して見せるのはやはり自分が働いて夫を喰べさせているとの自信の現われであるに違いない。
勝はそんなあやに文子のことを聞きたいと思ったが、やはりためらいがあったのは、今、美代子の結婚のことを口に出し、好きにさせてやれと言った直後であったからで、みすみす自分との仲をわからせるのではないかと考えたのだ。しかし、今のあやならば、文子との関係をはっきり打ち明けることは出来そうだとも思った。
「このあたりは昔そのままやけど、染屋もやってるんか？」
「まあぼちぼちな……、染屋はんも物持ってはるとこは強うてすぐに仕事が出来たけど、何もないとこは職人さん兵隊にとられて殆どいてへんし、雇うても喰べさすことも出

来んしな……」
「そうか……」
勝の口から染吉の名が出かかった。すると、あやは、
「ああ、あの染吉はんとこはかなりええらしいで……」
そう言い出したのである。
「吉沢は兵隊にとられたんかいな？」
「いや、とられはったけど、何か肋膜にかかってはったとかで帰って来て仕事してはる。けど今このあたりでは一番羽振りがええのんと違うか」
勝は、文子のことが今出るか、今出るかと待っていたが、あやの口からなかなか出なかった。
「何でや？　あの染吉はそんなに物持ってるわけやなし、それともわしが行ってからあのおやじの友禅有名になったんかいな」
文子のこともさりながら、その話になると勝も、あの都屋百貨店とのいきさつがどうなったか気になった。
「有名になるもならんも、あれからすぐにあの染吉さん亡うならはったんや」
「何やて！　染吉のおやじが……」
勝は驚いた。あの染吉の主人が死んだとは——。
「何や一晩のうちにな、朝起きはったら死んではったそうや」
「それなら……羽振りがええていうのは？」
あやは、言おうかどうしようかと迷っていたらしいが、
「文子さんや、あのひとお嫁に行かはったんや……」
「嫁に？」
勝の顔色は変わった。
文子が嫁に行った——。
勝はわが耳を疑って、あやを見つめた。
「ほんまや。お父さん亡うならはって弟さんは病気、どうすることも出来んかったんやろ。間もなく北野の小料理屋はんみたいとこで働いてはったんやけど、そこで見染められはった親子ほど年の違う物持ちのひとのとこへ行かはった……。お前が兵隊に行った翌る年や……」
勝は、体から力が抜けて行くのを知った。
戦地にいた時の生きて帰らねばならぬ目的のひとつはやはり文子であった。
帰って文子を何とか嫁にする、それが勝の目的であった。
それが足許から崩れ去ったのである。しかも他の男のところへ嫁いで行ったとは——。
「けどなあ、そのお蔭で染吉はんはようなったんや」
「そのお蔭で？」
勝はその母の言葉に引っかかった。
「そやないか。そうせんとあのひとも弟はんも生きて行けんかったんや。身を売るよりはお嫁に行かはった方がまだよかったやないか、そう思たげんと……」

そう思たげんととは、勝にそう思ってあきらめろということなのか、するとあやはすべてを知っているのであろうか？

勝があやを見ると、あやは堀川の流れを見つめたまま言葉を続けた。

「けどあのひと喜んで行かはったんやないで、友禅屋の娘が白無垢も着んともんぺ姿で嫁入りせんならんて……可哀相や……、それも戦争のせいや……そう思うてあきらめたげんと……」

あやは今度は、はっきりあきらめたげんとと口に出した。

「お母さん……知ってたんか！」

あやはやはり流れを見つめたままうなずいた。

「といってえらそうに母親らしい知ってたてなこと言うても、あんたが兵隊に行く前に知っていたらもっと何とかしてあげられたんやけど、何もしてあげられんかった。かんにんな」

「いや知っていても、親父があんなこと言いに行ったら何も出来んかったやろけど、何でわかったんや？」

「文子さんが来やはった……」

「何やて？」

「あてに逢いにな、お嫁に行かはる前やった。あてはそんなこと知らんと恨みを言うたんや」

あやは悲しげに川岸にうずくまると話し出した。

あやの話によると、いきなり訪ねてきた文子は、家の外へ出て来たあやに、

「勝さんがお帰りになったらお伝えして頂きたいことがあるんどす」

いきなりそう切り出して、あやをかっとさせたという。

「あんさん、必要な時だけ勝を使うて、染吉がようなったら要らんて、そらうちの人があんなこと言うて行ったさいてこともありますやろけど、せめて勝が兵隊に行く時ぐらい染吉さんのどなたかが見送りに来とくれやしても、それが人の道と違いますやろか、殊に弟はんは勝の同級生で、お友達どしたし、あんさんとは勝もけったいな噂迄たてられてまで働いてたんどす。そらな今のあんさんはお父さん亡うしはってお気の毒やと思てます。けど、やっぱり人の道外さはったらええことはおへんわな」

すると文子もはっきりと、

「弟のことは何とおわびしてよいかわからんと思うてます。けど、うちは勝さんのお見送りは致しました」

と言ったそうである。

「へえー、見まへんどしたな」

「いえ、このお家では遠くから見送っておりましたが、途中お父さんとお代りやしてどこかへお出でになってから四條大橋でお見送りしてましたし、そのことは勝さんもご存知どした」

そう言われてあやも怒ったことを気まずく思ったが、
「そうどすか、そら知りまへんどしたので、けど、そんなこそこそ見送ってくれはるさかい世間から余計けったいなこと言われるのと違いますか」
皮肉をこめて言ったが、文子はそれに答えず、
「その時、電車の中から勝さんが言うてくれはったことを、うちは、守れんさかいゆるしてほしいとあやまりに来たとお帰りやしたらお伝え願いたいのです」
「電車の中からて、勝が何を？」
「そう言うていただいたらわかって頂けると思います。いろいろご迷惑をおかけして申しわけございませんでした。ああそれからこれ洗濯する為に預かりぱなしになってた勝さんのもんどす」
文子は手にしていた紙包みをあやに手渡し一礼をすると、そのまま急ぎ足で歩き出していた。
あやは、何気なく紙包みを見てはっとしたという。
中に入っていたのが勝のワイシャツはともかく肌着があったからである。
いくら二人だけの会社であっても、女が男の肌着を洗濯するのは余程の仲でなければならない。
あやははじかれたように文子の後を追うと通りで呼びとめたという。
「あんさん正直に言うとくれやす。勝と何ぞ約束でもおしたんか？」
文子は静かに首を横に振った。
あやはちらっと包みの肌着を見て、
「けど……あの子とは……噂通り……」
すると文子は顔を上げてはっきりと、
「勝さんの名誉の為に申しておきます。決して噂のようないやらしい仲になったんやおへん。うちは勝さんを好いてました。信じて頂けまへんやろけど、うちにとっては勝さんは初めての男はんどした」
「そのこと染吉はんのお父さんもご存知どしたんか？」
「いいえ、初めてお母さんに打ち明けるんどす。誰も知らんことどす。そしてあんなことがあって、うちお別れしたんどす」
あんなことがあってとは、平太郎が染吉へ掛け合いに行ったことを指しているのは、あやにもわかってはっとしたそうである。
「そうどすか……。やっとわかりました。知らんこととは言え、すんまへんどした。もっと早う言うとくれやしたら……」
「いえ、すべてすんだことどす。それにうちお嫁に行きますので」
「お嫁に？」
あやが聞き返さねばならぬ程、事務的に嫁に行くと告げ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com